

中国にルーツをもつ児童生徒の大学進学の方略に関する研究

Research on the strategies of students who originated in China to go to university

趙 樹 娟*

ZHAO Shujuan

(要旨)

外国にルーツをもつ児童生徒は、日本の高校進学/卒業において困難を抱えやすく、そのため、これまで外国にルーツをもつ児童生徒においては、不就学、不登校、高校進学・中退に関する研究が多く蓄積されてきた。

本稿では、大学進学を実現した中国にルーツをもつ大学生がどのような状況でどのような対処・方略をもって進学できたのかを明確にすることである。筆者は、彼/彼女のライフヒストリーについてインタビュー調査を行い、来日時の在留資格と出願資格によって、4つのパターンに分類して分析を行った。

分析結果は次の通りである。第1に、外国にルーツをもつ児童生徒が日本の大学へ進学するためには、高校時代だけではなく、来日当初における日本語の習得、日本の学校・社会への環境適応ための重点的配慮も必要である。第2に、外国にルーツをもつ児童生徒にとって、日本での生活に馴染むまでは同級生との人間関係が担任の先生との人間関係より必要になるが、しかし、大学進学時期においては教員の助けがなくてはならない。第3は、成績の良い人が必ずしも大学に進学できるわけではなく、自身の努力以外に、日中の入学試験制度の違いやもっている資格などを精査して戦略的に利用できることが進学において重要である。

以上の結果から、本稿では調査対象者の共通性と結果から得られた示唆を指摘した。また、今回の研究では中国にルーツをもつ児童生徒を対象としたが、中国以外の外国にルーツをもつ児童生徒の進学行動における方略の解明も今後必要となる。

1. 問題設定

本研究の目的は、来日したニューカマーたちのライフヒストリーにもとづいて、彼/彼女が日本の大学へ進学するために、どのような対処・方略を試みたのかについて検討することである。

第二次世界大戦以前に流入した中国系、朝鮮系の移民をオールドカマーと称するが、その子ども世代は、帰化していない場合は外国

籍であるものの、日本語の使用には不自由していないことが多い。それに対して、1990年「出入国管理及び難民認定法」が改正されたことによる南米の日系人の流入など、いわゆるニューカマーと呼ばれる人々の流入は続いており、ポルトガル語やフィリピン語、中国語を母語とする児童生徒の公立小中学校への転入は現在も増加している。そうしたニューカマーの子どもたちに対して、文部科学省では「日本語指導が必要な児童生徒」という表

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程3年 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

現を用いるが、このカテゴリーには、日本国籍の子どもであっても日本語での授業についていけない子どもたちも含むことができる利点がある。また、現在私たちが「移動する時代」に生きていることを踏まえて、「移動する子どもたち」「移動せざるをえない子どもたち」という呼び方が提唱されたり（川上ら、2006）、その他にも「外国につながる子どもたち」、「JSLの子どもたち」^(註1)といった言い方がなされることもある。

しかし、どの呼び方が最も適当であるかを定めることは容易ではない。というのも、命名に伴って、対象とする子どもたちがどのような子どもたちであるかが限定されるわけで、それによって対象から外れたり、逆に必要のないのに対象に含まれる場合もあるなど、混乱を招くおそれがあるためである（河原、2010）。そうした危険を避けるアイデアとして、昨今では、「外国人」とは別に「外国にルーツをもつ」もしくは「外国にルーツがある」など、「ルーツ」というキーワードを用いる呼称が頻繁に使用されている。ルーツという言葉を用いることで、「何人（ナニジン）」という民族・エスニシティのコードから、必ずしも国籍によって線引きされない多様な子どもたちを、何世代にもわたって含むことができるようになる（藪田、2018）。

これらの点を踏まえ、本論文では「外国にルーツをもつ児童生徒」という、現在、一般的に普及している表現を用いることとする。ただし、本研究の対象はすべて中国にルーツをもち、中国で公教育を受けた経験がある人である。そのため、より厳密には「中国にルーツをもつ児童生徒」ということになる。

ところで、先述したいわゆるニューカマーの流入は続いている。人材確保が困難な産業分野に技能を有する外国人の受入れを図るため、出入国管理法（入管法）改正案が衆議院

本会議で可決され（2019年4月から施行）、外国にルーツをもつ人・子どもは今後も増加することが予想される。外国人児童生徒への教育にあたっては、「言語・文化の多様性」「日本に由来理由・時期・将来設計の多様性」「家庭環境の多様性」など多様性への対応が求められると同時に、学校への適応や居場所の確保、学習するための言語能力の習得、母語・母文化の保持、進路の問題、不就学など課題山積の状況にあるが（文部科学省2011）、これら課題は児童生徒自身や保護者の努力のみで解決できるものではない。

そうしたなかで、外国人が日本の社会で安定した生活を送るためには、日本語の習得や日本での学歴、あるいは、資格や技術などが必要である。特に、日本では高校卒業資格がないと就職が難しく、生活基盤も不安定になる可能性が高くなる。しかし外国にルーツをもつ子どもたちは、先ほど挙げた課題を複数抱えていることが多いことから、日本の高校に入学すること及び順調に高校を卒業することが非常に難しい。そのため、これまで外国にルーツをもつ子どもの研究は、不就学、不登校、高校進学・中退に関する研究を中心に蓄積されてきた。清水（2006）は、日本の学校の「特別扱いしないという制度的枠組みのもとで、ニューカマーの子どもは『やれている』という状態に覆い隠された不安な毎日を積み重ねた結果として、それがやりきれなくなれば不登校傾向を示し始め、それは必然的に高校進学を困難にする。また、言語環境によって引き起こされている低位の学業達成が、個人の努力の問題として処理されることにより、低位の学業達成の回復への道は閉ざされ、これもまた高校進学を困難にしている」（清水、2006：141）とその困難性について論じている。また、高校にかろうじて進学した場合でも、その中退率は日本人より高いこと

が指摘されている（佐久間、2006）。

高校生の進路選択に関する研究は、トラッキングシステム研究において知見の蓄積がみられる。トラッキングシステムとは「どのような学校や課程・コース（トラック）に入るかによってその後の進路が規定されること、さらに学校がそのような進路分化の機関となっているという意味をもつ考え方として用いられている」（高島、2018：83）。つまり、どのトラックに入るかによって、その後の進路が変わるという理論であるが、外国人は言語の壁があることから、大学進学に有利なトラックに進むことが難しい。しかし、外国にルーツをもつ生徒のなかにも、日本の大学に合格する人もいる。そうした人はどのような対処・方略をもって進学できたのだろうか。例えば、大曲ら（2011）の研究では、環境さえ整えば、日本で高校時代を過ごした中国人の大学在学率は、女子においては日本人と同等以上、男子においても日本人よりやや低い程度であることが明らかにされている。では、そうした中国にルーツをもつ大学生は、どうして高校中退もせず過ごせたのだろうか。彼らはもともと賢く、学力優秀な人材だったからだろうか。あるいは、来日期間の長短によって変わるのだろうか。こうした点については詳しく解明されていないことから、本研究では、大学進学を実現した中国にルーツをもつ大学生を調査対象に、彼らがどのような状況でどのような対処・方略をもって、進学できたのかを考察してみたい。

2. 調査対象と方法

本研究では、機縁法によるインタビュー調査を行った。調査期間は2018年5月から2019年2月までである。10名の調査対象者のライフヒストリーについて、半構造化面接法を用いて、1人あたり1時間～3時間程度のインタビュー調査を実施した。調査対象者は、すべて中国での学校教育を受けた経験があり、来日後は日本の学校教育を受け、あるいは、語学学校を経て、大学に進学した中国にルーツをもつ大学生である。なお、調査対象者は全員、調査時に日本の大学に在籍していた。

筆者は、外国人散在地域の小学校に日本語ボランティアとしては入った経験があり（2017年3月～2017年12月、週2日）、その話を皮切りにしてインタビューを行った。主な質問項目は、来日前から日本で大学進学するまでの過程で、来日前の状況や学力、来日当初の様子や気持ち、困難だったこと、学校生活（日本語支援と人間関係など）と進学までの努力と戦略など、そして家族の基本情報（家族の構成、保護者の職業、家庭で使う言語、ルーツなど）に関することである。

本研究は、本人の許可を得てICレコーダーで会話を録音し、トランスクリプトを調査データとして用いた。また、本研究で用いる人名はすべて仮名に変更している。学校名はa、b、cで表記し、学部名は α 、 β で表している。

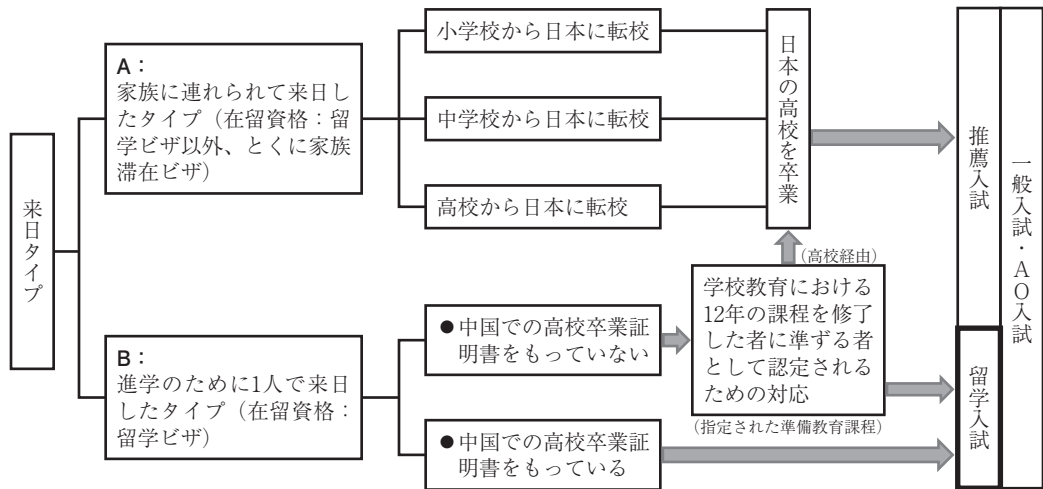


図1. 来日タイプと入試枠

(注)B②タイプの場合、一般入試・AO入試に出願は可能であるが、実際の受験ケースは極めて少ない。

ところで、外国にルーツをもつ児童生徒は、来日の在留資格によって日本での進学方略も異なっている。大別すると、A：家族に連れられて来日したタイプ（在留資格：留学ビザ以外、とくに家族滞在ビザ）とB：進学するために来日したタイプ（在留資格：留学ビザ）という二つのタイプに分けられる。Aタイプの場合は、小学校、中学校、高校など来日時期の違いを問わず、日本で大学進学したければ、日本の高校生と同様の入試を受けることになる。

Bタイプは中国での高校卒業証明書をもって来日するパターンともたずに来日するパターンがある。中国での高校卒業証明書をもっている人は、12年の学校教育課程を修了した者なので、日本の大学への入学資格をもっている。また、彼らがもっているビザは留学ビザなので、留学生枠と一般入試の両方利用できる。しかし、留学ビザをもっているが、中国での高校卒業証明書はもっていな

いタイプの人もある。彼らは学校教育における12年の課程を修了した者に準ずる者として認定されれば、日本の大学への入試は可能になり、日本の学校教育を経由する点で、Aタイプの人たちと似ている。そのほか、指定された準備教育課程（文部科学大臣指定準備教育課程）又は研修施設（文部科学大臣指定研修施設）の課程を修了する方法もある。

図1の枠組みに応じて、本論文では、①Aタイプのうち小学校時に来日したパターン、②Aタイプのうち中学校時に来日したパターン、③Aタイプで高校で来日したパターン、④Bタイプのうち中国の高校卒業証明書をもっているパターンの4つの事例を分析していく。本研究の調査対象者は10名だったが、その中から、自分の状況をよく覚えており、情報豊かな4名を分析対象に選んだ（4名のプロフィールは表1の通り。他の6名のプロフィールは巻末に添付）。

表1 事例対象者の概要

項目	氏名	事例1：王蘭・男	事例2：張紫・男	事例3：張白・女	事例4：賈竹・女
1	来日前学年・来日後学年	小5前期終わり 小5始まり	中1前期おわり 中2始まり	高3前期始まり 高1始まり	高3前期途中 語学学校（2年）
2	来日・調査時年齢	10歳・23歳	13歳・22歳	17歳・24歳	17歳・21歳
3	家族構成・職業・ （日本語レベル）	両親とも中国人 父親：料理人 （日常会話は可） 母親：アルバイト （単語レベル）	両親とも中国人 父：料理人 母：専業主婦 （両親とも日常会話 不可）	父：日本人 母：中国人 （両親とも日本語が 使える）	ひとりで来日
4	校内に外国ルーツ をもつ子供の人数	本人のみ	10人程度	本人のみ	全員
5	下校後、日本語を 勉強したか	ほとんどない	しない	とくにない	ない、アルバイトで
6	来日したての時に 受けた支援（期間）	日本語教室 （週1回、5年）	日本語教室 （週3回、1年）	通訳ボランティア （週4.5回、1年半）	なし
7	学校の部活動に参 加したか	バスケットボール部 （中学校と高校）	バスケットボール部 （中学校と高校）	英語部 （高校）	ない （学校に部活がない）
8	学校で不快体験が あったか	すごく喧嘩した	ある	ある・1回だけ	ない
9	進学した大学の種類	国立大学（a）	私立大学（b）	国立大学（a）	私立大学（d）

記：紙幅の点から考えて、表の中に小学校を「小」に、中学校を「中」に、高校を「高」に省略している。また、「小」、「中」、「高」に付いた数字の単位「年生」を省略している。

周知の通り、中国は日本の社会と同様またはそれ以上に「学歴」を要求される社会であり、大学へ進学できるかどうかによって人生が変わると考えられている。全国統一大学入試試験（「普通高等学校招生全国统一考试（The National College Entrance Examination）」、一般に高考^(注2)と称される）は、2003年から毎年6月7日～9日の3日間で行われる。大学に進学できるか、どのランクの大学に入れるかなどが主にこの一回の試験で決まるため、高考は人生の分岐点と呼ばれる。

一方、日本の大学入試は大きく分けて「一般入試」「推薦入試」「AO入試」があり、国公立大学と私立大学に分けられ、それぞれ大学独自の入学試験を実施している。中国の一回で決まる入試制度と比較すると、日本の大学入試はチャンスが多く、生徒もただ一回だけの筆記試験だけでなく、自身の学力や能力に相応しい制度を選ぶことができる。中国の場合、入試当日に調子が悪かったなどの理由

で得点が低かった時には、本来の学力に相応しくない大学に入るか、浪人することになる。しかし、日本の場合は、センター試験の結果が悪かった場合は、私立大学に志望を変えることもできるので、中国から日本に転校した児童生徒にとっては、日本の大学入試の仕組みを理解していれば、大学進学のコツは中国より多いといえるかもしれない。

日本の大学入試は日本人生徒だけではなく、外国にルーツをもつ生徒も利用できる。しかし、同じ入学試験の仕組みでも、外国にルーツをもつ生徒の方が、日本語、日本の文化・考え方などの社会化に対する理解・習得の程度が低いことから、日本人よりも、受験の難易度は高くなる。

3. 事例分析

日本の多くの学校が春休み・夏休み・冬休みを間に挟んで3学期に分けられる点とは異

なり、中国の学校の学年歴は、毎年9月から始まり、1月までを前期、3月から7月までを後期とし、それぞれの間に夏休みと冬休みが入る。そのため、中国の児童生徒が日本の学校へ転入するタイミングは、1～3月、7～10月が多いと推測される。以下、国公立大学と私立大学の入試の仕組みに注目しながら、調査対象者の事例を分析していく。

事例1【王蘭さん：国立大学・推薦入試、① Aタイプの小学校から来日のパターン】

王蘭さんは、10歳で来日し、調査時の年齢は23歳であった。彼の両親はともに中国人で、中華料理屋で働いている。来日後は週1回5年間続けて日本語教室に通った。

また、彼は中国で小学校5年生前期の課程まで修了したが、日本の学校に編入するとき、再び5年生の課程を最初から始めることとした。この半年間の重複によって、算数など一部の科目の知識は新しく習得する必要がなく、日本語の学習で大変な時期の学業負担をやや減らすことができるためである。王蘭さんは、日本の小学校に編入する数年前、その小学校に1ヵ月程度の入学生験をしており、5年生で編入した学級にはまだ記憶に残る同級生の中村君（仮名）がいたこともあり、やや気もちが楽になった。とはいえ、日本語の壁は高く、クラスメートと交流できず、いつも1人で寂しく通学して、家では電子ゲームをして過ごした。この状況が変わったのは、中村君が「一緒に遊ぼう」と王蘭さんを誘ってからである。その時から、王蘭さんはみんなと一緒に楽しく遊べるようになった。次第に日本語も上達し、毎日テレビを見ては話題を見つけ、友だちと話そうとつとめるようになった。

王蘭さんは、中国の東北地方の遼寧省瀋陽市の出身であり、両親は中華料理屋でアルバ

イトをしている。父親は日本語ができるが、母親の方はできないため、家庭では中国語で会話をしていた。来日前、中国では祖父母と一緒に暮らしていたが、祖父母は高齢で、学歴が低く、また孫を溺愛していたため、孫の勉強に熱心ではなかった。王蘭さんは中国ではほとんど宿題をせず、遊んでばかりであったため、学級50人のうち、彼の成績は中ぐらい（25番程度）であった。王蘭さんの日本での知り合いには中国人も多いが、しかし、彼の父親は王蘭さんのためにわざと中国人が少ない学校を選んだ。「私の経験上、中国人が少ないところの方が日本語を早く身に付けられる」と父親に言われたことを王蘭さんは覚えている。とはいえ、そのせいで、彼はからかいの対象になり、つらい思いをすることとなる。

小学校5年生のとき、本当に内気な性格だった。トラブルもよく起きて、喧嘩ばかりだった。しかし、父親に「心配しないで、誰かがあなたを殴れば、あなたも相手を殴りなさい。もし先生が保護者を呼んだら、お父さんが行くから」と言われて、すごく安心できた。例えば、「私は馬鹿です」というような）変な日本語を言わせようとしたり、（必要もないのに体を）触ってきたり。我慢できないときは、こっちから殴った。学級の担任が喧嘩の理由を聞くと、日本の子どもたちは正直に（自分の非を）認めるので、こちらは余り非難されなかった。中学校からトラブルは1回もなかった。（括弧内は筆者加筆。以降同様）

王蘭さんは、小・中学校は公立の学校、高校は私立学校に入った。日本の私立学校は、家庭の年収があるラインに届かないときは学

費が軽減・免除となる。王蘭さんの両親は共働きだが、アルバイトであったため年収は高くなく、3年間学費が全額免除になった。

王蘭さんは、高校3年生の11月に志望校をa国立大学に決めた。a国立大学は、センター試験（王蘭さんの志望学部は、数学、外国語、理科2科目のうち得点の高い1科目）を課すタイプの推薦入試を実施していたが、王蘭さんが選んだ外国語は中国語である。彼にとって、中国語は母国語であるだけでなく、「中国人から見ると、日本人ための中国語の試験内容はめちゃくちゃ簡単で、試験準備をしなくても楽勝」だった。日本人は、どの外国語を選択しても外国語としての難易度は変わらないが、王蘭さんは自分の得意な第一言語である中国語を選ぶことで、「外国語」の試験対策をせずに済ませた。また、理科2科目は物理と化学を選択したが、得意な物理に力を入れたので、実際の試験対策は数学と物理2科目で済んだ。つまり、日本人が4科目の受験準備をしている間、王蘭さんは2科目だけに集中できたのであり、その分できた余裕を使って推薦入試対策を練ったり、繰り返し復習することができたわけである。

通常、外国にルーツをもつ生徒は、試験で必要な語彙・文法が日本人生徒よりも劣ることが多く、受験では不利になる。そのため、王蘭さんは、まずは日本の入試制度について知ることから始め、必要最低限の教科と推薦入試に必要な面接と小論文だけで対応することに決めた。ところで、この方略を決める際に重要な人物となったのは高校の担任教員である。彼の両親は仕事で忙しく、また、日本の大学受験の経験もないため大学に関する情報については不案内である。入試の仕組み・情報を知り、小論文の書き方と面接方法を繰り返し練習するためには担任教員の協力が絶対に必要であり、そのおかげで、安心して受

験に臨むことができ、合格を果たした。

以上のように、王蘭さんがa国立大学に進学できたのは、まず、自分の状況を知り、自分の学力に相応しい大学を決めて、担任教員を味方につけて、受験科目が少なくすむ推薦入試を選んで時間を集中させたためであった。

事例2【張紫さん：私立大学・一般入試、②Aタイプのうち中学校時に来日したパターン】

張紫さんは、13歳で来日し、調査時の年齢は22歳であった。来日したてのときは、週3回の頻度で日本語教室で日本語の授業を受けている。

中国で中学1年生の前期を終えて来日した。先述したように、中国と日本では学年歴が違うので、日本で再度、中学1年生をはじめからやり直すか、半年早めて中学2年生へ編入することになる。張紫さんは、中国で上位の成績にあったので、半年飛び級して、2年生へ編入することを選んだ。張紫さんの両親は中華料理店で働いており、日常会話レベルの日本語もできなかった。張紫さんは友達をたくさん作りたい性格だったが、どうしても学級の雰囲気馴染めず、同級生との話題をうまく探し出せず、中学時代はまったく楽しくなかった。

彼は、ある中国人の先輩が私立の進学校に進学するのを見て、学校生活を一新するヒントを得る。来日時期は3年に満たなかったので、留学生枠を利用できる高校を選び、中3の1年間は勉強に費やし、県内の有名な私立高校へ進学した。留学生枠は毎年10名と少ないが、日本人なら、理科・社会・英語・数学・国語と面接を受験しなければならないところを、留学生枠なら英語・数学・国語と面接だけになる。現在、この私立高校は外国人生徒

の受け入れ枠をなくしたが、留学生枠のような情報は外国にルーツをもつ生徒にとって重要である。

中学校時代の学校生活はつまらなくてきつかったが、非常に大きな経験でもあったという。日本の学習内容は中国より少ないし、放課後の自由時間は多い。そこで、彼はバスケットボール部に入部した。バスケットボール部を選んだ理由は、話せなくても、競技できると考えたからだだったが、実際は日本語での指示・要求がわからず、コーチによく叱られるなど困ることもあった。しかし、続けているうちに、「これが日本だ」というところに気付くようになる。例えば、集団生活が優先されたり、上下関係が厳しかったりということは文字では伝わらず、実際に体験してみても、はじめて分かるものである。

張紫さんは、中学校の2年間の経験を生かして、高校ではうまくやりすごすことができた。高校3年生のときc国立大学を受験したが、不合格だった。その後、半年アルバイトをしてお金を貯めて、残りの半年は塾に入った。張紫さんは日本での在留資格は留学生ではないので、もう留学生枠を利用することはできず、日本人の高校生と同様の入試を受けることになる。そこで、塾の先生の指導通りに、自分の学力に相応しいb私立大学のa学部を目指して、猛勉強した。

張紫さんは、大学入試に失敗したこと、あるいはストレスや焦りでつらい思いをした浪人時代を振り返り、初めて大学受験した時には何の方略もなく、盲目的なやり方だったことを後悔していると語った。その翌年、改めて大学受験をするにあたり、彼は一般入試の国語で日本人に勝つことはできないと思い、その代わりに英語に力を入れることにした。英語の得点を高くすれば、国語の点数がやや低くても平気だと考えた。一見、張紫さんの

やり方は、国語が苦手な日本人生徒の進学方略とは変わらないが、実は、これもひとつの方略である。日本人と共に受験するとき、外国にルーツをもつ生徒は、日本語・日本文化への理解が不足するため、弱い立場に置かれる。それを自覚したうえで、受験科目選択をしたり、得意科目に注力することと、盲目的に日本人と同じように全科目受験することでは、合格可能性が異なってくるのである。

事例3【張白さん：国立大学・一般入試、③Aタイプのうち高校時に来日したパターン】

張白さんは、17歳で来日し、調査時の年齢は24歳であった。来日したとき、週4～5回の頻度で通訳ボランティアが1年半ついた。彼女のお父さんは日本人で、母親は中国人である。

彼女は中国で高校3年生の前期を終えたが、日本では改めて高校1年生から始めることにした。一般的な外国にルーツももつ児童生徒は学年齢より半年か1年下から始めるが、張白さんは学年齢より2年半戻ることになったわけだが、その理由は以下の通りである。まず、日本語がわからないので、もしそのまま高校3年生に編入すると、日本語の勉強をしながら、大学受験に必要な日本の歴史や文化についても並行して勉強しなければならず、1年間では時間が足りないと考えたためである。また、せっかく日本に来たので、どうしても日本の高校生生活も楽しみたいと考えた。

張白さんは、高校3年まで中国で過ごしたが、来日後、高校生活を通して無意識に日中の違いを感じるようになった。張白さんによると、彼女の中国での成績は優等ではなく、35名学級のうち18位くらいであった。また、中国の学校生活はすごくつまらなくて、毎日勉強づけで、体育、美術、音楽といった教科

もすべて国語、数学、英語に変更され、大学受験に必要な勉強以外のことは一切許されなかった。それに比べて、日本の学校生活はリラックスしていて、1日の授業が終わると自分のやりたいことをやれるので楽しかった。また、中国にいる時は、何のために毎日勉強しているのかよくわからず、いつも先生や家族の言う通りにやってきたが、それもつらかった。対して、日本の学校生活は本当に楽しく、自分の視野も広くなり、認識も変わっていった。

筆者：いつから日本の大学に行きたいと考えましたか。

張白さん：日本ででの学校生活は楽しかったので、日本の大学生活はどうかなあ、体験してみたいと思った。そのときからかな、進学したいと思ったのは。

筆者：中国とは違いますか。

張白さん：中国では周りの人たちの会話から、大学に進学できれば素晴らしい人だというイメージがあるけど、さっき言った通り、大学進学の意味が分からないし、自分の成績もよくないし、大学に進学できる自信を持っていなかった。大学に合格できるレベルの力もない。

「高校の学校生活が楽しいから、大学に進学したい」ことが、張白さんが日本の大学を受験しようとする動機となった。とはいえ、張白さんは、他の日本人受験生より国語、なかでも古文が苦手である。特に、カタカナで書かれた名詞、文章の理解などは大変不安であった。志望大学を決めるときに、高校の担任先生から「この国立のこの学部はできたば

かりなので、合格率が高いかもしれない。また、受験科目は英語、数学、国語の中から2つ選ばばいいみたい」と言われた。張白さんは、中国にいるときから英語が好きで、来日後も英語の勉強を続けており、高校では英語部の部長を務めるなど英語を得意としていた。そこで、a 国立大学のβ学部を選んで受験することに決めた。張白さんは早めに進学戦略を考え、この国立大学以外にも2つの私立大学を受験することを検討していた（が、国立大学に合格したことから、結局、私立の方は受けなかった）。

張白さんがa 国立大学に合格できたのは、まず、学年齢より2年半繰り下げたことが大きい。時間的な余裕をもてたことで、日本語を習得し、日本の学校生活へ馴染み、知識を蓄積することも焦らずに準備できた。次に、自分が得意な科目があったことである。張白さんは、英語が得意で、市レベルのコンクールにも参加したことがある。英語という得意科目があったことが、張白さんにとって有利に働いた。また、高校の担任の先生のおかげで、チャンスを得て、設置されたばかりの学部に入学できた。

事例4【賈竹さん：私立大学・留学生枠、④ Bタイプの中国での高校卒業証明書をもつパターン】

賈さんは、17歳で来日し、調査時の年齢は21歳であった。賈竹さんの経歴は、一般的な外国にルーツももつ大学生とは少し違っている。彼女は、家族とは来日せず、来日当初からひとり暮らしをしており、日本ででの滞在資格は「留学」であった。留学生としての滞在期間が制限されているため、決められた期間内に進学しなければならないというリスクがあった。

彼女は、中国で高校3年生の前期の課程を

修了してから、日本の語学学校に入学したため、日本に来た当時（4月）は、中国の高校卒業証明書を持っていなかった。しかし、彼女は高校3年生前期（その年の1月）に中国で「普通高中学業水平考試」（会考と呼ばれる）を受けてから、4月に来日しており、その2ヵ月後に高校卒業証明書を手に入れた。つまり、賈さんは日本に来たときは、高校卒業証明書を持っていなかったが、実際は3回の会考（高校2年の1月、7月、高校3年の1月に一回ずつ）を受けたので、中国で2年半の課程しか修了していなくても、高校卒業証明書を授与されたわけである。

彼女は中学時代に中国の安徽省合肥市で少し日本語を学んだものの、なかなか覚えられなかった。高校時代に北京市に転校した当時は、30名学級で16位くらいの成績であったが、「中国の大学進学はすごく残酷だ、自分の成績なら、中国でいい大学に行けない。もし、日本に来たら、もっといい大学に行けるかもしれない」と考え、高いランクの大学に入る可能性の低い中国よりも、日本の大学に進学することで人生のチャンスをつかもうと考えた。そこで、仲介会社^(註4)の紹介を経て、東京の語学学校に入学した。午前中は、語学学校で受験科目（日本留学試験のための日本語、英語、文系総合・理系総合）を学び、午後は、ほぼアルバイトをして過ごした。

語学学校のクラスメートは、すべて日本以外の国から来日した外国にルーツももつ生徒である。語学学校で2年間過ごす間に、1度、校長先生にクラス替えを申し込んだ。語学学校のほとんどの学生は、私立大学を目指しており、特に小論文と面接が重要になる。しかし、前のクラスではその練習をしていなかったうえに、勉強する雰囲気弱かった。そこでクラス替えを希望したところ、新しいクラスはやる気に満ちている人が多く、小論文の

練習も週3回なされていた。振り返ってみると、クラス変更の判断は正しかったと言う。

筆者：なぜd大学に受験しましたか。

賈竹さん：2年間ずっと東京にいたので、続けて東京で暮らしたい。でも東京の国公立大学はセンター試験で高得点が必要だし、試験内容も難しい。だから、私立大学を目指した。d大学に決めた理由は、d大学が留学生入試をしているから。入試は日本語、総合、数学しか受けない。でも、学部によって科目も変わるのだから、私は受験の時、数学を受けていない。二次試験は、面接と小論文である。小論文と面接は1年間続けて練習してきた。あまり難しいと思わなかった。試験が終わって、知り合いと話したとき、その人たちの不合格の原因が分かった。彼らは平日に小論文を練習していなかったから、受験の時、問題と書くべき内容がずれていた。90名の留学生が留学生入試でd大学を受けたが、20人しか合格できなかった。

賈さんは、語学学校に通っていたので、日本留学試験に応じた内容しか学ばない。また、入学試験に日本留学試験を利用している学校（利用校）の数は私立大学より国立大学の方が少ない^(註5)。そのため、彼女は早めに私立大学にねらいを定めた。日本留学試験を利用していない国立大学を受験したければ、センター試験を受ける必要がある。しかし、彼女のような人にとって、学校教育のように系統的に知識を習得できる可能性は低かった。センター試験を受け、国立大学に合格できる確

率も低かったわけである。

4. 考察と課題

外国にルーツをもつ子どもの進路困難に関する要因において、佐藤（2010）は、①入試の壁、②経済・社会的格差によるアクセスの不平等、③日本語力に端を発する低学力、④家族が支えにならない、⑤役割モデルの不在という5つを提示した。外国にルーツをもつ子どもが、日本語を身につけるには長い時間を必要とするし、教えられる人員や教材などの確保も課題であるため、日本人生徒と同等の語彙を身につけることは非常に難しい。外国にルーツをもつ生徒の高校進学の原因と現状に関する研究は重要であるが、どうやって高校生活を過ごして、順調に大学へ進学できたのかに関する要因を把握することもまた重要な課題である。

本研究での調査結果をまとめると、3つの重要なポイントが指摘できる。

第1に、日本で進学できた外国にルーツをもつ児童生徒にとって、順調に大学進学を果たすためには、高校時代だけではなく、来日初めの時期において家族からの全面的支えを得たり、日本の学校・社会へ環境適応するための重点的配慮も必要だという点である。

というのも、大学進学に影響を及ぼす方略は、来日当初にも示されたからである。入学情報の収集や入試方略の作成などは高校時代に行われるので、高校時代はカギを握る重要な時期であると思われている。それは確かであるが、しかし、時間軸を拡大させて、来日当初から大学進学するまでを辿ると、彼らにとって来日当初の方も欠くことができない重要な時期であることが明らかになった。事例1の王蘭さんの例では、彼は父親に「家の周りでも、学校の中でも、中国人の子ども

がいれば、日本人の友達と遊ばなくなる。日本語の習得も遅くなる」と考え、中国人がいない学校にわざと編入させた。これは王蘭さんの父親が彼のために検討した戦略の1つである。しかし、そのせいで、日本語の壁などを原因にいじめられたり、放課後に1人で寂しく電子ゲームをするなど暗い時期を経験したが、事例1口述（110ページ）のように、いじめに対抗して友だちを作ったことで生活は一変した。この変化は、父親が「心配しないで、誰かがあなたを殴れば、あなたも相手を殴りなさい。もし先生が保護者を呼んだら、お父さんが行くから」と言ってくれたように、家族の全面的支えあつてのことである。もし、いじめが続き、また友だちもできていなければ、学校をやめたかもしれない。大学進学も夢となる。

また、大学進学のための努力はもちろん重要であるが、日本社会・文化への理解度も重要となる。事例2の張紫さんは、中学生の苦しい時期に「これが日本だ」という日本社会・文化への理解を形成していった。このおかげで、高校から現在までうまく過ごすことができていると言う。中国人として、もともと持っている国民性などは簡単には変わらないが、ずっと中国での意識をもって、日本で生活するのもあり得ないことである。日本人の集団に入って、日本人なら、どのようなルールをどうやって守るのかなどのしつけを習得する必要がある。そうすれば、日本人の考え方をより深く感得でき、日本の学校さらには社会にうまく適応できる。張紫さんにとってより重要だったのは日本社会・文化を感得できたことである。

その他にも、来日当初に決めなければならない方略がある。事例3張白さんは、中国で高校3年生の前期まで終えたのに、日本では改めて高校1年生から始めることにしたこと

も方略の1つと言える。彼女は「日本語がわからないので、もしそのまま高校3年生に編入すると、日本語の勉強をしながら、大学受験に必要な日本の歴史や文化についても並行して勉強しなければならず、1年間では時間が足りない」と考えた。また、「せっかく日本に来たので、どうしても日本の高校生生活も楽しみたい」とも思い、学年齢より2年半戻ることに決めた。このような決断は来日当初に限られるものである。

いずれにしても、事例1、事例2、事例3の調査対象者すべてに言えるのは「中国で友達がたくさんいて、人と喋るのが大好きだったのに、日本に来たら、意思疎通できなく、友達もいないし、とうとう劣等感が強くなってしまった。どンドンしゃべりたくなかった」という経験である。もちろん、日本語の習得は大事であるが、友達を作ってあげたり、心のケアをしたりすることも大事である。

第2に、外国にルーツをもつ児童生徒にとって、当初日本での生活に馴染むまでは同級生との人間関係が重要だが、大学進学時期には、担任の助けが不可欠であり、教員との関係がより重要となる。外国にルーツをもつ児童生徒たちは、学校では日本語で勉強・会話をするので、放課後にはほとんど疲労困憊している。そのため、家庭ではほとんど日本語の勉強をしていなかった。授業では、主に教科に関する知識・用語を日本語で習得するが、そのような日本語は日常的には使うチャンスが少ない。日常的な日本語会話は、クラスメートとのコミュニケーションによって習得する。もちろん、授業で使う日本語は欠くことができないが、日本文化・社会への理解のためには日常的な日本語でのコミュニケーションの方がより重要であろう。調査対象者10名のうち8名は、学校の部活動に参加していた。クラスメートと話すための話題を見つけた

め毎日テレビを見ている人も1人、2人ではない。外国にルーツをもつ児童生徒にとって、部活であっても流行の話題であっても、これらの共通性は日本語の習得、日本文化・社会を早く理解できるために、日本人児童生徒とつながっていることである。

それに対して、大学進学時期に外国にルーツをもつ生徒と担任の先生との関係が重要になるのは、進学情報を教えてもらい、また励ましを得られるためである。日本人生徒であれば、家族や親戚ら進学に関する情報や助言をもらえる。また、普通に暮らしているだけで、自分がどうしたらいいのかはなんとなくわかる。しかし、中国人生徒は、いつ、どんな入試があるのか、願書の書き方や面接の注意点程度のこともよくわからない。そうしたなかで、担任の情報は、経験・実績にもとづいているため信用できるし、また、新しい制度や大学・学部の情報についても詳しい。事例3の張白さんは、担任からできたばかりのa国立大学のb学部の情報を入手できたことで、合格可能性が上がり、進学できた。また、両親が、入試に必要な日本語での正式な会話ができなかったり、日本の大学への進学経験がない場合、面接時に注意すべき礼儀・会話のテクニックや小論文の書き方などは担任の先生しか教えられない。事例1の王蘭さんは、担任の先生から小論文の書き方と面接の仕方を繰り返し練習させてもらったことで、安心して受験に臨むことができ、合格を果たした。

第3は、成績の良い人が必ずしも大学に進学できるわけではなく、日中の入学試験制度の違いや自分が利用できる入試資格等を精査して、戦略的に利用できることが進学行動において重要となる。本調査対象者は、中国での成績が優れているわけではなく、中位またはやや下位に位置していたが、大学進学を果たした者たちであった。むしろ、事例2の

張紫さんのように、中国でも日本でも成績の良い人がスムーズに大学に進学できなかったケースもある。張紫さんは、もともと成績がよかったものの、初めて大学受験した時には盲目的なやり方で失敗した。そこには、自分自身の努力以外に何らかの方略が必要だったと言える。外国にルーツをもつ児童生徒が日本の大学進学する際には、言語面などでデメリットがあるものの、状況を正確に把握し、自分にあった対処方略を研究すれば、大学進学の可能性は高くなる。

前述したように、外国にルーツをもつ子ども来のパターンは、A：家族に連れられて来日するタイプ（在留資格：留学ビザ以外、とくに家族滞在ビザ）とB：進学のために1人で来日するタイプ（在留資格：留学ビザ）の2つに大別できる。家族に連れられて来日するAタイプの外国にルーツをもつ児童生徒は、学校教育の中で、日本の高校への進学・卒業に必要な科目や、高校・大学受験に必要なノウハウについて体系的に教えてもらうことができる。また、国公立大学を狙う人が多い。その理由として、中国では、一般に、国公立大学の方が私立大学よりもランクが高いため、日本でも国公立大学へ進学することを保護者に期待されることがあげられる。さらに、国公立大学の方が学費が安い点も理由として大きい。ただし、Aタイプの児童生徒は、在留資格が「留学ビザ以外、とくに家族滞在ビザ」のため、「外国人留学生入学試験」という枠を使わず、日本の高校生と同様の入試を受けることになる（逆に言えば、日本人と同様、自分のランクに応じた好きな大学を選択できる）。その他、中国人が中国語の試験科目を「外国語」として選べる（事例1）ことも、有利な点であろう。

一方で、1人で来日するBタイプは、高校時代から来日することが多く、留学生学級の

ある通常高校か、語学学校に所属することになる。語学学校の学生が受験する場合、語学学校では受験科目しか教えないので、私立大学を目指す傾向がある。Aタイプの人より教科知識は浅く、あるいは留学生学級の場合は日本人との接触が少ないので、日本語の面でも不自由なところがある。周りに母国語で交流できる友だちが多いことは心理的な安心につながるものの、しかし長期的にみると、日本人と付き合うチャンスが減るので、日本語を習得し、話題を身に付け、日本社会を理解することが遅くなる。

また、事例2の張紫さんは学級の雰囲気を読めなかったことでつらい中学校時代を送ったが、友人を一新するために、みんなが目指さない離れた進学校を選んで高校に進学した。彼はまったく楽しくなかった環境でも、自暴自棄にならず、学校生活を経験しながら、日本に来て3年未満だったことを生かして留学生枠を精査して利用したが、これも1つの方略である。

最後に、いくつか今後の課題を提示しておく。まずは、外国にルーツをもつ児童生徒にとって、大学進学や高校卒業を果たすためには、どの段階で何が重要な要因となるかをより詳細に解明することである。外国にルーツをもつ児童生徒の来日時期はさまざまであり、またどの程度日本語ができるかも人によって異なるので、単純な基準では分析・考察することができない。そこで、たとえば、日本の学校に入学してから日本での学校生活を馴染むまでと（以下、第I段階と表す）、日本の学校生活に馴染んでから大学に進学するまで（以下、第II段階と表す）の2つの段階では、それぞれ必要なサポートは異なるのではないかと考えた。本調査結果の当事者たちからみると、第I段階がより重要であると思う人が多かったが、どのような点で重要な

のかについては更なる調査基準が必要である。

また、本論文は中国にルーツをもつ児童生

徒を対象としたが、中国以外の外国にルーツをもつ児童生徒の大学受験に関する課題についてもさらに検討を加えたい。

〈注〉

- (1) Japanese as a second languageの略で、「第二言語としての日本語」のこと。日本語の力が不十分なため授業について行けない子どもに対して、授業に参加するための日本語力と日本語で学ぶ力を育成することを目的としたモデルカリキュラムであり、教師が柔軟にカリキュラムを構成できる。(文部科学省 2011『外国人児童生徒受入れの手引き』)
- (2) 中国の大学入学試験では、国語・数学・英語は受験必須科目である。文系生は文系の総合学(地理、歴史、政治:日本の公民科目と似ている科目)を受け、理系生は理系の総合科目(物理、化学、生物)を受ける。2003年から中国教育部は大学で学生募集方式(自主募集^(注3))の改革に着手した。しかし、この改革はまだ整っていない。主流は高考を通して、進学する方法である。
- (3) (中国)教育部は2003年、北京大学や清華大学等の22の大学で学生募集方式の改革に着手した。各大学は独自の筆記試験および面接試験による一次試験の合格者を決定し、その後一次試験合格者は高考に参加して、成績が各大学の定める水準をクリアした学生に入学許可を与える方式を認めた。但し、この大学独自の一次試験による入試は、当該年度の入学学生全体の5%以内とする条件が付けられた。(中国総合研究・さくらサイエンスセンター China Research and Communication Center (CRCC) 『中国の高等教育システム』 (https://spc.jst.go.jp/education/higher_edct/hi_ed_3/3_2/3_2_1.html(2019/04/03閲覧))
- (4) 来日前、仲介会社の職員と両親から、語学学校のことをたくさん聞き、中国人が多い、進学率の高い語学学校を買さんは選んだ。というのも中国人生徒が多いので、何かわからなくても、中国人に中国語で教えてもらえると考えたからである。語学学校のクラス分けの能力検査には、筆記試験と面接試験がある。毎週月、火、木、金曜日の午前中は日本語を教えらる。水曜日の午前中は英語と文系総合・理系総合(EJU日本留学試験のため)の授業があるが、担当の先生の教え方とクラス

のレベルによって、その内容は異なる。また、午後はすべて休みで、アルバイトをしたり、自習をしたりする。授業料は年間60万円程度である。買さんが選んだ語学学校には奨学金など支援システムはない。学生は学校が紹介するアパートを借りられる。学校でクラスを変えたいときは、お金を払わずに、試験を受けるか、担任の先生と相談して決める。

- (5) 入学試験に関する日本留学試験(EJU)を利用している学校(利用校)の数
https://www.jasso.go.jp/ryugaku/study_j/eju/examinee/use/use_number.html
(2019/06/27閲覧)

参考文献

- 趙 衛国 2008 「中国系ニューカマー高校生の異文化適応過程に関する研究—文化的アイデンティティ形成との関連からの検討—」平成20年度東京大学大学院教育学研究科博士(教育学)学位論文
- 広崎純子 2007 「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択—支援活動の取り組みをと通じての変容過程—」『教育社会学研究』80巻, 227-245頁
- 細川卓哉 2011 「外国人生徒の高校進学に関する教育課題—特別入学枠に着目して—」『教育論叢』54巻, 3-12頁
- 金井香里 2012 『ニューカマーの子どものいる教室—教員の認知と思考—』勁草書房, 1頁
- 河原俊昭・山本忠行・野山広 2010 『日本語が話せないお友達を迎えて—国際化する教育現場からのQ&A—』くろみお出版, 171頁
- 川上郁雄 2006 『「移動する子どもたち」と日本語教育——日本語を母語としてない子どもへのことばの教育を考える——』明石書店, 3頁
- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・斎藤ひろみ・野山広 2009 『「移動する子どもたち」の言葉教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振』ココ出版, iii頁
- 中島和子 2010 『マルチリンガル教育への招待—言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房

西川朋美・青木由香・細野尚子・樋口万喜子
2015 「日本生まれ・育ちのJSLの子どもの日本語力」『日本語教育』160巻

大曲由起子・高谷幸・鍛治致・稲葉奈々子・樋口直人 2011 「在学率と通学率から見る在日外国人青少年の教育—2000年国勢調査データの分析から」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8巻, 38頁

御館久里恵 2011 「外国にルーツを持つ子どもの支援活動に参加する渡日経験者の語り——かれらのライフコースと支援活動における当事者性」『異文化間教育』33巻,115-126頁

佐久間孝正 2006 『外国人の子どもの不就学：異文化に開かれた教育とは』勁草書房, 261-263頁

佐藤郡衛 2010 『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育—』明石書店, 148-149頁

清水睦美 2006 「ニューカマーの子どもの青年期（＜特集＞青年の進路選択と教育学の課題）」『教育学研究』73巻4号, 141頁

高島秀樹・住田正樹 2018 『変動社会と子どもの発達—教育社会学入門 [改訂版]』北樹出版,83頁

高瀬克義・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文 1986 「青年期の環境移行と適応過程（1）」『日本教育心理学会第28回大会発表論文集』556-557頁

坪谷美欧子・小林宏美 2013 『人権と多文化共生の高校—外国につながる生徒たちと鶴見総合高校の実践』明石書店

藪田直子 2018 「『外国人児童』カテゴリーとその境界—公立小学校における参与観察調査から—」『日本教育社会学会第70回大会』当日配布資料, 1-2頁

事例対象者の概要表

名前と性別	⑤于梅・女	⑥大村菊・女	⑦郭太陽・男	⑧李成・男	⑨高美・女	⑩王楽・男
1 来日前学年・入学学年	中2（前期）・中2	小2・小2	高1・高1	中2（前期）・中2	小5・小5	高1・中2
2 来日・調査時期年齢	13歳・20歳	・19歳	15歳・19歳	13歳・24歳	11歳・20歳	15歳・21歳
3 家族構成・職業・（日本語レベル）	父親：日本人 母親：アルバイト（日常会話は可）	父：日本人 母親：中国人 兄：中国人（中国にいる）	1人で来日	母親：アルバイト（日常会話か）	両親：会社員（日常会話は可） 兄：（日常会話は可）	父親：料理人 母親：専業主婦（日常会話不可）
4 校内に外国にルーツをもっている人数	本人しか	2人	20人	2人	25人程度	7-8人程度
5 下校後、日本語を勉強したか	ない	ない	最初の3か月に	ない	ドリルをやる	国際交流会館週1回、
6 来日した時の時に受けた支援（期間）	2/3名日本人ボランティア/何週間	日本語教室週1回/1年間	日本語教室/半年	日本語指導/週2~3回/半年	国際教育教室週3~4回/2年	日本語相談室週1回/1年 足りない
7 学校の部活動に参加したか	演劇部	書道	許可を得ない	バスケットボール	陸上部	同好会
8 学校で不快体験	ない	ある	ある	ある	少ない・1回だけ	ない
9 進学した大学の種類	国立大学	私立大学	国立大学	国立大学	私立大学	国立大学